

震災時は病院も大変だった

くまもとせきじゅうじびょういん
熊本赤十字病院

震災で停電、暗闇の中で処置



重症患者に馬乗りになって、心臓マッサージを行いながら搬送した

熊本市東区の熊本赤十字病院は、地震の被害が大きかった益城町に一番近い大病院で、負傷者が約1400人も詰めかけたが、震源に近いとあって、病院も停電し、暗闇の中で処置するなど、全職員が必死で診療にあたった。

病院によると、職員も4割以上が被災した。しかし、まもなく全国から支援があり、職員は交代で休むことができるようになった。また入院の数が多くなったので、他の病院と協力し、入院患者を転院させて、運ばれてくる患者のベッドを確保した。手術も立てこんでいて、他の病院で手術をしてもらうこともあった。震災では協力が必要と感じた。負傷者の手当てでは「トリアージ」という仕組みを使



救命救急センターには地震直後から救急車が列をなし、続々と患者が運び込まれた



患者を搬送しながら治療ができるドクターヘリも使われた

って、患者の治療の優先順位を決めた。けがの程度に応じて窓口で黒、赤、黄、緑の札を付ける。スピーディーにおこなうにはこのような工夫が必要と感じた。特に骨折や手足のけがが多かったため、軽度を意味する緑を使うことが多かった。水が不足して、給水車の水や井戸水を浄化して使った。入院している人の血が洗えず、使い捨ての皿を使っていたが、それも不足した。他にも治療に使う包たいやガーゼが足りなかった。また、直接死より多い関連死を防ごうと、予防活動を行った。そのために避難所の環境を良くした。避難所の前に手洗い場を作ったり、避難所の床をふいたりした。震災の時は、協力や心遣いが大切だと思った。(金田 昂樹)

混乱時だからこそ被災者の負担を減らしたい、とお医者さん

地震によるケガ人がたくさん運びこまれた上に、停電もあった熊本赤十字病院では、職員は仕事だけでなく家族のことも考えなければならなかった。

奥本さんの家では4月14日夜、大きな揺れが収まっ

て安心したので、落ちてきた食器や本などを片付けていた。その地点では大きな地震がもう一度来るなど思ってもいない。そのため、みんな家の片づけなどをして、ほっと一息つき、次の災害のことなんて考えてもいなかった。

しかし28時間後また大きな地震がきた。きれいに片付けた物も、元通りグチャグチャになってしまった。心もスタスタになった。「安心のあとの一撃はダメージ倍増」という奥本さんの言葉は、まさにその通りだと思った。

このような状況をさけるには、普段から安全な場所を決め、必要な物を用意しておくことが、とても大切だ。また、「思う」だけでなくそれを行動に移して、知らない人に伝えていくことが、被害をすこしでも減らすことにつながると思う。いつ大災害が来てもおかしくないという雰囲気、ある程度持つだけでも心構えになる。

お医者さんは自分の気持ちですらまだ整理がつかないにも関わらず患者の心のケアも行っている。奥本さんは、職員が救護所に出かける際も「こんな時だからこそ、被災者の負担を減らしたい」と、職員に自分用の食べ物やテントを持参して被災者に迷惑をかけるまいと指導した。

やはり、お医者さんとはとても大変な仕事をしていると思った。私たちにとっては、なくてはならない特別な存在だと改めて感じた。

(立松 陽夏)



震災当時の様子を話してくれた熊本赤十字病院の奥本克己医師



ドクターヘリの内部には様々な医療設備が整っている